

武部 勤のアジアの未来図



武部 勤氏 略歴

前衆議院議員(8期)。農林水産大臣(第33代)、自由民主党幹事長(第39代)、衆議院議院運営委員長(第63代)を歴任。

議員時代にベトナム友好議連会長、インドネシア友好議連会長、メコン友好議連会長、モンゴル友好促進議連会長、バーレーン友好議連会長を務めたほか、昨年3月1日には社団法人日本ベトナム経済フォーラムの名誉会長に就任するなどアジアを中心とする諸国との友好に尽力。一般財団法人「東亜総研」会長。

ユスロン駐日インドネシア全権大使に聞く 両国関係の重要さ

この2月、古い知己であるユスロン・イザ・マヘンドラ氏が駐日インドネシア全権大使として着任された。氏は筑波大学に留学経験があるほか、現地紙「コンパス」の日本支局長を務めた経歴を持つ知日派であり親日派。そんな氏が大使として着任されたことは、日本および両国関係にとって心強い出来事である。個人的にもこのような形で再会することができ嬉しい限りだ。インドネシアは、日本にとって政治・経済の両面における最重要国の一つである。2億4,000万人を超える巨大な人口を擁し経済成長が目覚ましい同国は、日本にとって将来を支える重要なパートナーとなる筈である。今回は私が聞き手となり、ユスロン大使に自身や両国関係に対する想いについてインタビューを行ったので、その内容を対談形式でご紹介したい。なお快く受けていただいたユスロン大使の友誼、全面的に協力してくださったインドネシア大使館の皆様に対し、誌面をお借りしてお礼を申し上げたい。

「『日本に留学すればインドネシアの宝になれる』と助言され決断」

武部：大使が日本を留学先を選ばれた理由をお聞きしたい。

ユスロン・イザ・マヘンドラ大使(以後、ユスロン大使)：私が米国や欧州ではなく、日本を留学先として選んだことは偶然ではなく必然であったと思っている。

政治学部国際関係学科を卒業後、政治学の修士課程に進み、近く留学したいと考えていた。同学科には若い先生が二人おられた。おひとりは後に経済担当調整大臣を務められた方で、もうおひとりは文部大臣などを歴任された後、防衛大臣を務められた方。

そのお二人から「このままではインドネシアに日本のことがわかる人がいなくなる」「日本に留学しなさい。そうすれば、君はインドネシアの財産になる」と勧められた。当時、インドネシア人の留学先と言えば欧米が圧倒的に多く、日本への留学は極めて少なかった。このように素晴らしい言葉をもらって自慢したいほど嬉しく感じたのを覚えている。

そうして文部科学省の奨学金により筑波大学への留学が決まったのだ



が、博士課程に進むためには日本でもう一度修士課程を専攻しなければならなかった。そこで今まで学んでこなかった法学を専攻することにした。博士課程では政治経済学を専攻した。

武部：現地紙「コンパス」の特派員となられたのは？

ユスロン大使：博士課程3年目のこと。膨大な資料を元に研究に没頭するなかで、様々なアイディアが頭の中に

生まれた。それをまとめ、コンパス紙の日本支局に持ちこんだところ「特派員にならないか」と。

大学で研究を進めながら、記者としての仕事もこなすようになった。博士課程修了後、支局長に就任。支局長としては2年間過ごした。

武部：私が大使と出会ったのはその頃。

ユスロン大使：多くの日本の政治家に会ったが、その中でもとくに忘れら

れないのが武部先生。兄(ユスリル・イザ・マヘンドラ元国家官房長官)も、よき親友として武部先生の名前や顔をよく覚えていましたよ。

武部：大使は山崎拓先生を訪ねてこられた。山崎先生が渡辺美智雄先生の後任として日本インドネシア友好議員連盟会長に就任されて。私も事務局長として同席したのだが、おふたりがとても若いので驚いたのを覚えている。山崎先生は後で「これは大物になる。切れすぎるほどだ」と話しておられた。

日本で研究者として評価されるも 呼び戻されて国会議員に

武部：その後、インドネシアに戻り国会議員となられた。

ユスロン大使：当時、インドネシアに戻りたいとは考えていなかった。そもそも私は研究者志望であった。

私の博士論文のテーマは「雁行型経済発展」。当時「アジアの奇跡」という言葉が流行ったが、私は否定的であった。クルーグマン先生(ポール・クルーグマン、ノーベル経済学賞を受賞)と結論は同じだが、それに至るアプローチは異なる。

「アジア経済は不健康であり、真の成長には至っていない。産業の木はアジアの土地に根付いていないポット植えに過ぎず、環境が変わればアジア経済の木は枯れてしまう」というのが私の主張だった。

この考えは当時、筑波大学に認められず卒業が半年遅れたほど。ところが通貨危機後、評価が一変。筑波大学のTARA(筑波リサーチアライアンス)の研究員に任命された。

研究者とし実績を重ねようという時、前述した当時の経済担当調整大臣から「インドネシアのことを忘れていないのなら帰国しなさい」と諭され帰国。産業大臣のアドバイザーを2年間務めた。その後も日本に帰りたいが、兄から国会議員として立候補するように言われ政治家の道を歩むことになった。

当選後、第1委員会副委員長として外交・防衛・情報を担当。政治・軍事・防衛的な戦略を学んだことが、現在の考えに大きな影響を与えている。

武部：今後、日本とインドネシアの関係はより重要になる。

ユスロン大使：日本が中東から石油を



運ぶためには、マラッカ海峡を通る必要があり、我が国の安定が必要不可欠。両国は切り離せない国と神様が決めたのではないかと思えるほど。国家も人間と同じで独りでは生きていけない。

駐日インドネシア大使として考えるのは、アジア太平洋および東アジアにおいて問題が生じた時、日本とインドネシアは何をすべきかということ。経済面だけでなく安全保障も同様。日本が防衛産業などでインドネシアと協力関係を深めることは、地域関係や経済発展にも意義があり、経済的地理的な安定は両国の国益にも適うと考えている。

武部：まったくの同感だ。

ユスロン大使：我が国への投資の主役は日本だが、中国や韓国の投資も増加しており、このままでは我が国における存在感は弱まってしまう。

ジャカルタ〜バンドン〜スラバヤ間の新幹線、ジャカルタ市内のMRT、港湾整備、電力不足の解決などインフラ整備はビジネスチャンスであり、この分野への投資が増えれば両国関係も密接になるのではないかと。インドネシア国民が豊かになり購買力が上昇すれば、日本企業が生産したものを我々ももっと購入することができるようになる。

武部：多くのインドネシア研修生が来日しているが、帰国後の就職先はあるのだろうか。

ユスロン大使：それも大きなビジネスチャンスだろう。約5,000人ほど来日しているがノウハウと知識を身につけても活かせないのであれば意味がない。日本基準の野菜づくりを勉強し、帰国後インドネシアから日本に輸出するなどやれることは多いはず。

武部：食料の安全保障の観点から

も、いくつかの輸入先を確保することは重要だ。研修生問題は両国政府のさらなる取り組みが必要だろう。

「アジア基準作りにリーダーシップを持って取り組んで欲しい」

ユスロン大使：現在ASEAN諸国は「ASEANビジョン2020」の実現に向け取り組みを進めている。将来的にアジア全体の基準になるのではないだろうか。日本には文化・教育・観光などの面において、アジア諸国との人的交流を深め、リーダーシップを持ってリードして欲しいと願っている。

武部：大使はパイプ収集が趣味と聞いた。

ユスロン大使：パイプは煙草を吸うためだけではなく、芸術品として収集している。日本で記者をやっていたときに、銀座に行きつけのパイプ屋さんがあり芸術的なコレクションが揃っていたのを覚えている。世界中から200本以上のコレクションを集めた。盆栽も趣味のひとつ。日本に留学する前から、自分で本を読んで楽しんでた。

武部：大使は日本語が堪能、人柄も素晴らしいので、日本全国を歩いて、対話をしてもらえば、大使の人柄を通じてインドネシアのファンが増えるだろう。日本の中小企業は良い技術を持っており、アジアに積極的に進出したいと思っている。インドネシアは大きなマーケットであり可能性も大きいので、中小企業が進出するチャンスも今後増えるだろう。両国の友好のため、発展のためご尽力していただけることを期待している。本日の対談を引き受けてくださったことに感謝申し上げる。